

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：23902

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 年度 ～ 2012 年度

課題番号：22720162

研究課題名（和文）

母音連鎖推移に対する言語接触の影響 - タジク語とウズベク語の母音音素体系

研究課題名（英文）

Language contact influence in vowel chain shifting: A case study from Central Asia

研究代表者

井土 慎二 (IDO SHINJI)

愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：80419233

研究成果の概要（和文）：本研究を通して得られたタジク語音声とウズベク語音声の分析によって、両言語の接触地域において母音音素体系の収束がおそらく起こっていること、そしてこの収束がおそらくタジク語の母音連鎖推移に干渉していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：An analysis of the Tajik and Uzbek audio data collected for this study strongly suggests that a merger of vowel systems has taken (or is taking) place in the Bukhara area and points to an interference of the merger with the Tajik chain shift.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	0	0	0
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：歴史言語学、言語接触、母音、連鎖推移、タジク語、ウズベク語

1. 研究開始当初の背景

(1) 初期近世ペルシア語の母音音素体系は、初期近世ペルシア語が中央アジアでタジク語へと変化するに伴い、大きく変化した。初期近世ペルシア語からタジク語に至る過程での母音音素体系の変化はイラン語学によりおおよそ跡付けられている。しかし筆者の知る限りこの変化を母音の連鎖推移として分析した先行研究は無い。また中央アジアの言語が連鎖推移の研究に取り上げられることは殆ど無い。

(2) 連鎖推移についての研究についていえば、その多くは言語内の自律的变化としての連鎖推移に注目しており、少数の例外を除いて従来の連鎖推移の研究において言語接触のような他律的变化が考慮されることは無

い。

2. 研究の目的

(1) 初期近世ペルシア語からタジク語が派生する過程での母音音素体系の変化を連鎖推移及びタジク語とウズベク語間の言語接触の影響の観点から捉え直す。

(2) 言語接触が連鎖推移の一要因であることを示し、連鎖推移の研究に他律的要因を導入する。さらに、初期近世ペルシア語の母音音素体系の変化を初めて連鎖推移として分析する。

3. 研究の方法

(1) タジク語とウズベク語方言のデータを

得るため、フィールドワークを行う。現地で複数の話者による母音の発音の高品質な録音をする。録音データのフォルマント解析をおこなう。

(2) 現地以外では入手が困難な現地研究者による先行研究を現地で収集する。

(3) フォルマント解析結果を記述し、現地で収集したものを含む先行研究を踏まえて、その理論的な含意を論ずる。

4. 研究成果

(1) 本研究は、タジク語母音音素体系の成立が、連鎖推移と言語接触の帰結であることを明らかにする目的をもつものであった。平成24年度においてこの所期の目的はほぼ達成された。つまり、本研究を通して得られたタジク語音声とウズベク語音声の分析によって、両言語の接触地域（の少なくとも一つ）において母音音素体系の収束がおそらく起こっていること、そしてこれがおそらく連鎖推移に干渉していることが明らかになった。本研究は汎言語的な連鎖推移原則では一意に定まらない推移の説明に言語接触の導入が有効であることを示唆した点で希少性が高い。また、母音音素体系の収束は報告された例が少ない現象であり、定量的なデータに基づくものはさらに少ない。本研究はこの点で独創性が高いといえる。

(2) 先ず、両言語の接触地域（の少なくとも一つ）において母音音素体系の収束がおそらく起こっていることについては、ブハラータジク語話者、ブハラウズベク語話者、そしてタシケントウズベク語話者の母音体系の対照が明らかにした。

ブハラ地域はタジク語とウズベク語の接触地域で、両言語が何世紀にも渡って接触してきた。ブハラはウズベキスタンの領内にあり、ブハラータジク語話者は事実上全員がウズベク語との二言語併用者である。しかしブハラウズベク語話者も通常タジク語のある程度の運用能力を持つ。

まず、図1にブハラータジク語話者の発音におけるタジク語の母音音素体系を示す。

(図1及び図2の散布図は NORM (Thomas & Kendall 2007) を用いて作成された。)

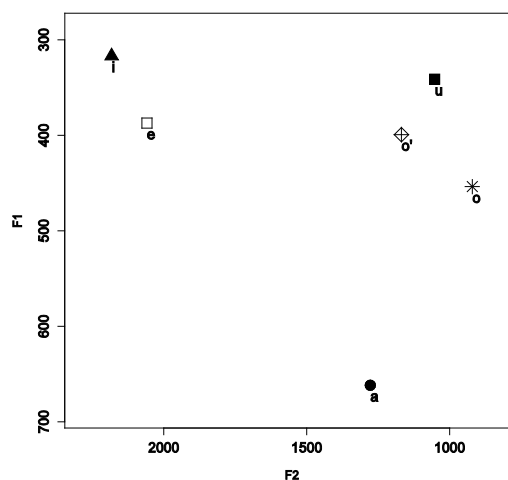


図1 ブハラータジク語話者のタジク語母音体系

一方、ウズベク語もブハラータジク語同様6母音を持つ。しかしウズベク語の母音音素体系はブハラータジク語の母音音素体系とは異なっている。

ところが、図2から明らかなように、ブハラータジク語話者の使用するウズベク語においてはその母音音素体系はタジク語のものと同様である。つまりブハラータジク語話者は自らのウズベク語にウズベク語の母音音素体系を使用しておらず、タジク語のものと同じの母音体系を使っている。

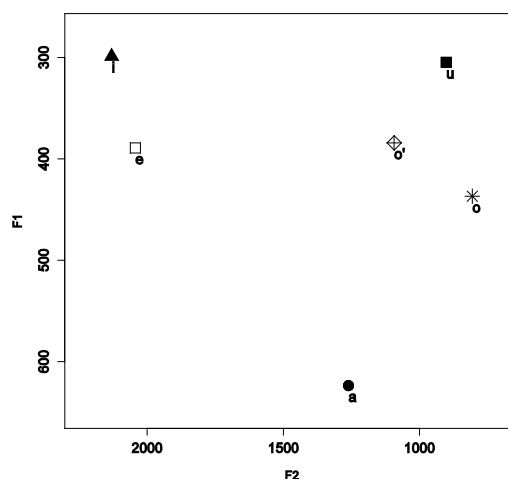


図2 ブハラータジク語話者のウズベク語母音体系

ブハラータジク語話者の使用するウズベク語母音音素体系はどのように(標準)ウズベク語と異なるか。その相違点は①図2で*と記された母音がウズベク語のものよりも狭く②øと記された母音がウズベク語のものよりも前寄りであることである。

ところが、本研究でのブハラウズベク語

話者のウズベク語の母音のフォルマント解析によって、この二点は、ブハラ語話者のウズベク語の母音音素体系にも観察される特徴であることが分かった。

つまり、ブハラ地域ではタジク語話者とウズベク語話者の両者が非標準的なウズベク語母音音素体系を用いており、その母音音素体系はブハラのタジク語のそれとの類似によって特徴付けられている。これは、言語接触がブハラにおいてタジク語とウズベク語の母音体系を収束させた、もしくはさせつつある可能性を示唆する。

ブハラにおける母音音素体系の収束を示唆する他の事実も存在する。例えばブハラ地域のアラビア語においてはそのタジク語の母音の位置に母音が推移したことが報告されている (Tsereteli 1970)。

また、そもそもタジク語とウズベク語の両者が母音音素を6つ備えていることも言語接触による収束を示唆する。(両言語とも接触地域から離れた地域では7つ以上の母音音素を持つ方言が多くを占める。)

さらに、タジク語の母音音素体系は初期近世ペルシア語のそれから変化する際に $a > o$ と $o > e$ からなる母音連鎖推移を起こしている (図3左図参照)。母音連鎖推移自体は初期近世ペルシア語から派生した他の南西イラン語の変種にも見られる。ただし、それは図3で「ペルシア語」と記してあるパターンとの連鎖推移、即ち $a > o$ と $o > u$ からなる母音連鎖推移である。タジク語に起こった $a > o$ と $o > e$ という推移は実はウズベク語との接触地域に起こった推移であり、タジク語と同じく初期近世ペルシア語から派生したダリー語やペルシア語には見られず、さらには接触地域以外のタジク語方言にもみられない。

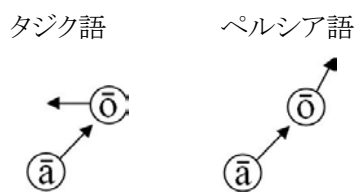


図3 タジク語とペルシア語の母音連鎖推移

この中で右側の連鎖推移は、多くの言語で見られ、汎言語的な母音音素連鎖推移の最も強い原則にも設定されている (Labov 1994: 115-137)。実際に南西イラン語でも、ペルシア語及びタジク語の多くの非接触方言で見られるパターンである。それに対して、左側のものは接触地域のタジク語に限定的である。

このことから、タジク語の母音連鎖推移に対するウズベク語との接触の干渉を疑うことができる。そして、上述のように、音声デ

ータの分析から接触地域では母音音素体系の収束が起こった、もしくは起こっている可能性が示唆されたことから、このタジク語の母音連鎖推移における $o > e$ の推移の原因を接触地域における母音体系の収束に求められるかもしれない。(数世紀前のウズベク語には e 、または e のような円唇の非後舌母音があったし、現在でも接触地域以外の地域の諸方言にはある。) これはとりもなおさずタジク語母音音素体系の成立への言語接触の干渉を示唆する。

対照実験ができない言語接触の研究に原理的に「証明」はない。確実性の高い事例を蓄積することが必要になる。上述の複数の事例は言語接触がタジク語の母音音素体系の成立に干渉した、もしくは干渉していることを、証明はできないが示唆するに足る。

(3) また、当初の目的には含まれていなかったが、定量的なデータの解析によって得られた知見も少なくなかった。

例えばブハラのタジク語の /i/ と /u/ は強勢が無い開音節で弱化を起こすことは先行研究に記されているが、これが定量的に確かめられた。

(4) 本研究を通して得られた音声データは貴重であるが、このデータにはまだ分析を加えておらず、未利用のものが残っている。今後このデータの分析を行い、新たな雑誌論文や研究発表につなげていく予定である。

参考文献

- Labov, William. 1994. *Principles of linguistic change Volume 1: Internal factors*. Oxford: Blackwell.
- Thomas, Erik R. and Tyler Kendall. 2007. NORM: The vowel normalization and plotting suite. [Online Resource: <http://ncslaap.lib.ncsu.edu/tools/norm/>]
- Tsereteli, Giorgi V. 1970. The influence of the Tajik language on the vocalism of Central Asian Arabic dialects. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 33(1), 167-170.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① Ido, Shinji, Illustrations of the IPA: Bukharan Tajik, *Journal of the International Phonetic Association*, 査読有、巻号未定

[学会発表] (計1件)

①Ido, Shinji, One vowel system for two languages: The vowel inventory of Bukharan Tajik-Uzbek bilinguals, The 13th Language and Society Conference, New Zealand, 2012年11月29日、University of Auckland, New Zealand

〔図書〕（計1件）

①井土慎二、東北大学出版会、タジク語文法便覧、2012、204

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井土 慎二 (IDO SHINJI)

愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：80419233